２０２２年８月２８日「御言葉よ、広く高く深く」　　本所緑星教会　岡田 いわお牧師
聖書　マタイ福音書１３章３１～３３節

私たちは夫婦牧師として、これまで鹿児島に二年、そして奥羽教区の男鹿教会に７年おりました。その秋田の男鹿から、本所緑星教会に赴任して、もう六年目なのですが、一つ寂しいな、と思うことは東京に来てから、他教会、つまり緑星教会以外の教会で礼拝をもつことが、ほとんどなくなったことです。秋田にいた時は兼務教会ばかりでなく無牧の教会の講壇奉仕ということもよくありましたが、東京に来てからは近隣教会との交わりが少なくなったな、と少し寂しいものがありました。ですから、こうして青戸教会で新鮮な気持ちで皆さんと、御言葉の分かち合いができますこと。本当に嬉しく思います。

さて、最近、私が楽しみにしていることはパン作りであります。といってもホームベーカリーで作るわけですが、あの焼き立てのパンの香りと、引き立てのコーヒー。たまりません。ただ、ホームベーカリーを買ったばかりのころは失敗ばかり。連れ合いの恵美子に一度作ってみな、と言われて、初めてのパン作りは失敗してしまいました。私は以前浅草橋の香料会社にいたことがありまして、その頃の経験があるから、かなりの自負がありました。たとえば、計量するのは誰よりも早いとかですね。もう得意げに作り始めたのですが、その自慢が傲慢になり、恵美子から言われていた一つの注意ごとを疎かにしてしまったのでした。私は、もう自信満々で、香料会社にいた時のように、手際よく計量して、さっとホームベーカリーに入れて、しばらくして、パンができました。ところが、ぜんぜん膨らんでいないのです。硬くて、いかにもまずそうなパンが完成して愕然としました。パンが上手に出来なかったということも、そうですけれども、自分の過去の経験への過大評価というか傲慢さに、なによりも愕然としました。パン作りで大事なこと、それはイースト菌を水に触れさせないことです。それを恵美子に作る前に注意されていたのですが、それを疎かにしていたのですね。つまり、パンを膨らませるイースト菌の扱いが、パンをつくるにあったって大事なことであったにもかかわらず、私は、自分の経験を自慢することに頭がいっぱいであったことが、このパン作りの失敗に繋がった、ということであります。

私の中で、小さい自分の過去の自慢がこのパン作りを通して、私の中にこの時、小さく眠っていた過去の自慢が大きく膨らんでいたのであります。私たちは時に、自分の中にある小さな思いが、思いがけず大きく膨らむことがあります。それは、大抵、今言ったような過去の自信によって夢が膨らむということが起こります。その場合は大抵、名誉欲や欲望と絡むことが多いのではないでしょうか。夢が膨らむということ自体は悪いことではありませんが、例えば、バンドで自分の音楽が認められ、たくさんの人に賞賛されたい、とか、有名になりたい、ということのことを夢が膨らむ、と表現するように思えるのですね。でも、まあ、これは夢ですので、妄想だとしても、それはよしとしましょう。

それよりも、嫌なのは、嫌な妄想が自分の中に膨らんでくる、ということでありましょう。こちらの方が、よくあるかもしれません。ちょっとしたミスをしてしまった。あるいは余計なことを発言したことで妄想が膨らみます。誰に迷惑がかかっているではないか、どんどん膨らみます。さまざまな人に変な人、嫌な人、仕事が出来ない人、勉強が出来ない人、頭が悪い人だと思われるのではないか、そういう妄想がどんどん膨らみます。もう、世界中の人からそっぽ向かれるんじゃないか、なんてね。まるで、小さい種が成長するように、あの、私のちょっとしたミスが、あの時の言葉が…。頭の中で妄想が成長しまくって破裂しそう。こういうことは、私でなくともよくあることなのかもしれません。なぜでしょうか。この答えがすぐに出たら、精神科医はいらなくなるでしょう。もしかしたら、私たちの脳の仕組みとも関係がある、なんていうことを今日はお話したいのではありません。でも一つだけいえること。それは、人間の世界とはそういうものだということであります。おそらく考えることができる限り、この悩みは尽きないということでありましょう。

今日の聖書箇所は、『からし種』と『パン種』のたとえ」です。おそらくイエスさまのたとえの中では、非常にわかりやすいたとえの一つです。まずはパン種の方に目を留めますと、実は、まったく逆のニュアンスで書かれているところが別にあります。みなさんご存知の通り、「ヘロデのパン種」ですね。このマタイによる福音書１６章では「ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種」となっておりますが、これは、どういう場面でイエスさ

まが語られたかというと、舟にイエスと弟子たちが乗り合わせたときに、大事な食料であるパンが一個しかない。「ああ、やってしまった…」というものです。弟子の中で誰が食料係りであったかは、わかりませんが、おそらくここにいた誰もが、妄想したことでしょう。「これで多くの人たちに迷惑をかけてしまった！」もの忘れがひどい自分が責められるかもしれないし、劣等感もどんどん膨らんでくるかもしれません。この舟に一緒にいたイエスは何と言ったか。それが、「ファリサイ派とサドカイ派」、マルコでは「ヘロデのパン種」に「よく気をつけなさい」ということなのです。ところが、弟子たちはイエスが何を言っているのかわかりませんでした。それでも、「ああ、大事な食料であるパン忘れたからだぁ」、「やっぱイエスさま怒ってる」って思ったのではないでしょうか。ところが、イエスは怒ったのではありません。ファリサイ派、サドカイ派、あるいはヘロデ、その「パン種」。つまり、人間の価値観の典型ですね。そして、私たち人間の悩みのありようです。私たちは、自分の例をとってもそうですが、例えば、忘れっぽい自分が人に迷惑をかけている、など、そっちが膨大に膨らむのです。その意味ではイエスさまはちょっと怒っているかもしれません。「耳があっても聞こえないのか。覚えていないのか」。というように。ここでイエスさまが言いたかったこと。それは「わたしがここにいるのに、まだ人間的価値観で妄想が膨らむのですか！」。たった、五つしかなかったパンとたった2匹の魚で、五千人分の食糧が行き渡ったのですよ！　それでだけじゃなくて、なおかつ余ったでしょ。それを目の前で見ていて、まだ人間的価値観にその悩みの方が膨らみますか！ということです。あなたがた、もうすでに神の国の中にいるんですよ。もう祝福の中にいるのに！ そんなイエスさまの、確かに、苛立っている姿が描かれているように思えます。

その、神の国の只中にいる喜びに立ち帰りましょう。いま、今日、ここに教会に集う、それだけで神の国の喜びを分かち合える。いや、いつもイエスさまがどんな時でも一緒におられる、ということは、私たちの人間的価値観の悩みではなく、まさに今日の箇所『からし種』と『パン種』のたとえ、この世界の只中にいる、ということを、御言葉は示しているのです。

先ほど、ホームベーカリーのお話をしましたが、人間的価値観の妄想と同時にですね、ドライイーストと、からし種って、どちらもほんとにちっちゃな粒だなという共通項を思いました。もちろんドライイーストの方はほとんど粉ですので、大きさの比較ではないのです。ともかくからし種もこんなちっちゃな種というより粒ですね。パン種も、からし種も、どちらも不思議なほど大きな木になり、そして、こんな小さな粒が、というものが大きく膨らむのです。

「天の国」つまり「神の国」は、その、たとえ小さな喜び、祈りであっても、大きく、高く、広く舞い上がるように、広がって行くということであります。それは、私たち人間的価値観からくる、悩みや妄想と比べ物になりません。というより、私たちは既に、人間的価値観ではなく、「神の国」の祝福にいることを、イエスさまが常に聖霊の働きによって、「神の国」の側に（人間的価値観にではなく）私たちを置いてくださっているのです。

だから、どうか、「あっ、やっちゃった」ってところから妄想を膨らませるのではなく、また、忘れちゃった、迷惑そのものの自分、みたいなことで思いを膨らませるのではなく、むしろ、こんな小さな、私一人の祈りでも、どんどん広がっていく。人がいない、廃れていく、一人しかいない、というところに妄想を広げるのではなく、この確かに人間的価値観ではひとりぼっちの、小さな祈りかもしれない。けれども、神の国にいる私たち、この小さな祈りが、どんどん広がっていく。神の世界の只中にいることのできる、私たちに、感謝し、喜び、そして安心して歩むことができればと思います。

私は時に讃美歌を作曲するのですが、その中でも自分で気に入っている曲があって、「主と共に」という曲なのですが、歌詞の最初に「ぼくは、ひとりで、祈る」からはじまる曲なのです。今度機会があったら、みなさんにも聞いていただければな、なんてお思いますが、これは、まさに、こんな小さな僕の祈りでも、たとえ、ひとりぼっちでも、世界が神さまの愛で満たされる、その為の神さまの爆発的な祈りに繋がるという喜びの賛美です。私たちはまず、主と共にいる。神の国をこの教会で分かち合える。既に、教会が、世界が神の愛で満たされている、でもそのことを、小さな私が、僕が一人で祈る、ということであります。どうか、この喜び、祈りが、そして御言葉が、神さまの価値観がむしろ、この世にあって、広く、高く、深く膨らむことができますように祈ります。